

秋の彼岸によせて

平成二十四年九月 大乘寺 住職 岡 光俊

今回は仕えることの大切さについて考えてみましょう。

皆さまは毎日、「こと」に「仕え」ています。そう、「仕事」の本  
来の意味です。

辞書には、神に奉仕する。宮中に仕える。父母に仕える。師に仕  
える。

白川静文学博士の辞書には、「士は小さな<sup>まさかり</sup>鉞を、刀を下にして置  
いた形で、戦士階級の身分を示す儀礼用の器である。士は戦士階級  
として王につかえる者をいう。」とあります。

人類が地球上に現れてきたときのこと、古代文明を紐解いていく  
なかに、本来人として生きる基本が隠されていると思います。そし  
て、今も日常的に使っているこの言葉に、その大切なメッセージが  
込められていると思われれます。

人類以外の生命は、どこにあっても自然の摂理「万象を支配して  
いる理法」に従って生きています。

古代文明の象形文字からも、人類が神々と祖霊と共に生活してい  
たことが解ります。それも、今のような、何でも人間中心の考えの  
なかでの神や祖霊ではなかったようです。それらを中心に、生活が  
なされていたようです。

我が国においても、つい最近まで村のお祭り行事を中心に、村人  
たちの年間の生活が決められていたことから、中心は祖霊であり、  
神であったことは間違いないでしょう。

それらを忘れ怠ることは、自然の摂理から、神や祖霊の縁から益々  
遠のいて行くことになるのではないのでしょうか。

仕えるという文字も、人間同士の関係よりも人間と神、また人間にとって最も神に近い王に対し用いられたものなのでしょう。

仕えるという動作には、そこに相手を真に尊ぶ心がなければなり立たないと思います。

父母を、神や王のように尊ぶ家庭に不和が存在するのでしょうか。

我々の日常生活のなかで誰もがよく使っている言葉に「仕方がない」という言葉があります。

そこには諦めと、諦め以外にない現実、ほかにどのような方法もなかったということなのでしょう。

私たちは、皆がまったく違った一日一日を頂いております。

その違いは、縁によって変わっていく。その姿を見たとき、縁にすべての原因が込められているように思います。どのような縁の元に生まれさせて頂いたか、どのような父母の間に生まれさせて頂いたか、どの国に生まれさせて頂いたか。

縁は、無限の方向性と無限の力と無限のなにかを持っています。

私たちが自然の摂理から学ぶことは、その生き物が持っているそのモノを活かすことで、自然は充分に応えてくれるということでしょう。

私たち人間であれば誰でもできること、貧であっても、老いていても、無学であってもできること。休むことなく感謝を持って尊んでさせて頂ければきっと縁はよき方向に舵を切ってくれるのでしよう。その舵は神がお切りになるのではなく、自然の摂理を守り実行することで縁が切ってくれるのではないのでしょうか。

因縁因果の法則をお借りすると、自分の今の言動すべてが縁の因

子となるという意味でしょう。

父母に敬いの心で向き合う、祖霊に敬いの思いで感謝する。秋の夜長、人であれば誰でもできることをしてみましよう。

祖霊に仕え仕えているご家庭には、仕方がないことは起きません。

それは、祖霊が縁を持って私たち現世の者にお返しして下さるからです。

父母へのお仕え、祖霊へのお仕えが毎日できているかたに仕方がないことは起きません。

ことが起きたときには必ずその出来事に向き合い仕える方法、仕方が解るように祖霊よりお教え頂けます。

合掌